

シネマ探訪

時代劇ロケ地探訪 亀岡編 長谷川哲也 三重フェス

「水戸黄門は諸国を漫遊していない。京都及びその周辺から外へ出ていない」ということを、かつて聞いたことがある。これは撮影場所のことを述べているのであるが。では、いったい何処で撮影が行われているのか？ずっと分からないままだった。

ところが、最近になって、作品終了後のクレジットに撮影協力した機関名が出るようになったことと、インターネットで、「作品名・ロケ地」と入力して検索をかけ、ひっかかってきた関係サイトに入っていくことで、撮影場所を容易に探せるようになってきた。京都市及び近郊で撮影された時代劇について、上記の手法で探し、現地へ足を運んでみた。

今回は亀岡市の撮影場所について紹介してみたい。

へき亭

千歳町毘沙門向畑に所在する。玄関の門と周囲の石垣土塀が素晴らしい。「へき亭」の主である日置家（へきけ）は、旗本津田氏の代官を代々務めていた。美濃（岐阜県）に本拠地

をおく津田美濃守の知行所が亀岡の毘沙門村にあり、規模は戸数七十軒・石高三百石余であった（亀岡市史）。

自分が知る限り、この地での撮影は、テレビ時代劇『斬り抜ける』（昭和49年 近藤正臣主演）から『三屋清左衛門残日録』（平成28年 北大路欣也主演）まで、40年以上にわたって続けられている。

なお、「へき亭」は一般公開されており、予約により食事をいただくことができる。

丹波国分寺跡

へき亭の北西方向数kmの千歳町国分桜久保に位置している。

国分寺とは、奈良時代、仏教による国家鎮護を願った聖武天皇の詔によって、全国各地に建てられた僧寺のことである。

現在は金堂や回廊等、当時の建物はなく、七重の塔に使われた礎石が広大な寺域の中に残されている。また、江戸時代、後継寺院として建てられた、浄土宗寺院の本堂・鐘楼・山門を見ることが出来る。こちらのロケ実績も長く豊富であり、最近では平成27年の下半期の朝ドラ『朝が来た』の撮影が記憶に新しい。

走田（はせだ）神社

神社内の建築物も撮影に使われているが、茅葺の屋根を持つ社務所が何と言っても素晴らしく、外観が庄屋等として設定されている。

この他にも出雲神宮（千歳町出雲）『妻はくノ一』、養源寺（保津町訳目）、石田家住宅（東別院町東掛岩垣内）などで撮影が行われている。このように亀岡市は時代劇撮影の宝庫であり、昭和・平成の時代を経て、令和の現在も継続されていることが素晴らしい。



へき亭玄関の門

長岡花火物語

村上 暁
スタッフ

シネマ游人第4号の特集「私が選んだ日本映画歴代ベスト3」で、僕は大林宣彦監督『この空の花―長岡花火物語』を選んだ。憧れの長岡花火。今年の夏、ようやく花火観覧チケットを入手できた。

昼間のうちに、映画のロケ地を探索。まずは、新聞記者役の松雪泰子が訪れる「長岡戦災資料館」へ。長岡空襲で、アメリカ軍が投下した収束焼夷弾と焼夷弾子弾の模型があり、手に触れることができる。かなりの重さがあり、屋根や防空壕の破壊はもちろん、人間の体にも容易に突き刺さることが想像できる。こんなものが雨のように降ってきて、しかもガソリンをまき散らし発火したら…。大変な恐怖を感じる。

この資料館には、ハワイの真珠湾攻撃を伝えるコーナーも



ある。真珠湾攻撃を指揮した山本五十六が長岡市出身ということ、長岡市と真珠湾のあるホノルル市が提携し、互いに戦災の痛みを共有するために作られた。被害だけでなく、加害の実態も学ぶことが、本当に戦争を理解するために必要であるとの考え方。最近の日本は、加害の事実を認識することを「自虐史観」などと呼び、目を背けようとする人が増えている。全国の戦災資料館が、参考にすべき取り組みであると思う。

3階には戦災殉難者の遺影。小さい子供から老人まで、壁一面に写真が飾られていた。映画の中盤に、空襲を生き残った人々が体験談を語るシーンがある。この写真一人一人を愛する人がいたこと、悲しみが存在したことを、映画の中のシーンとともに思い起こさせる。

資料館を出た後、平潟神社へ。戦時中は大きな防空壕があり、空襲時に多くの人が逃げ込んだ。空襲で生き残った語り部役の角替和枝が、平潟神社での惨状を語る。人々が殺到した防空壕の中で、黒焦げの死体、蒸し焼きの死体、圧死の死体を見たと言言する。妊婦の股間から、胎児が半分飛び出したまま黒焦げになっている死体も。地獄のような光景が、角替の口から淡々と語られる。

もう一人の新聞記者である原田夏希と松雪泰子が、話をしながら歩く柿川沿いの道。劇中のシーンを思い出しながら下流へ歩くと、平和の森公園がある。ここは、高校生たちが「まだ戦争には間に合う」という演劇を上演する場所。

松雪泰子や高嶋政宏が観覧していた土手に同じ

ように座り、目を閉じる。映画のクライマックスが目には浮かぶ。焼夷弾が落ち、火柱が立ち上る中で、高校生たちが一輪車に乗り、駆け回り、這いつくばり、泣き叫ぶ。家族を呼ぶ声、助けを求める声、救おうとする声。たくさんの声を、演じる高校生たちを通して聞く。

ヒロインの花（猪俣南）は、被災者たちの「声を届かせたい」と願い、この演劇の脚本を書いた。戦争の悲惨さを多くの声で届けたい。次の戦争を起こさないために。



平和の森公園

花たちは叫ぶ。「まだ戦争には間に合いますか」。映画が作られた2011年から8年が経過した現在、この国はますます戦争をする国に近づいていると感じる。高校生たちの問いかけに、今の大人たちは何と答えればいいのだろうか。

夕刻、信濃川の堤防へ。日が落ちて、まだ完全に暗くなる前に慰霊と平和祈念の3発の花火が上がり、花火大会がスタート。小ささまざまな花火が夜空を彩る。

長岡花火は、戦時中一時中断されていた。終戦間際の昭和20年8月1日、長岡空襲により町は壊滅。約1500名もの犠牲者が出た。1年後、人々は復興にかける強い思いを胸に、「長岡復興祭」を開催。その1年後の昭和22年8月1日、戦争犠牲者への追悼と、平和への祈りを込めた花火大会が復活した。現在は、空襲のあった8月1日を「戦災殉難者の慰霊の日」、2日と3日に花火大会が行われている。観光客誘致のイベント花火ではないので、開催曜日を土日に合わせることはしない。

2005年からは、前年に起こった新潟県中越地震からの復興を祈る「フェニックス」花火が打ち上げられている。東日本大震災が起こった2011年には、被災地の石巻市で復興

を祈って、2015年には、ハワイ真珠湾で両国の戦争犠牲者慰霊のため、長岡花火を打ち上げた。復興、平和への願いが、日本だけでなく、世界の人々をつないで広がって行く。

劇中、東日本大震災があつた2011年の花火大会は自粛しようとする会議のシーンがある。その中で、東日本大震災で姪を亡くした女性が発言する。「子を亡くした姉は、姉にしか分からない悲しい場所にいます。私は姉と一緒に花火が見たい。きれいだなと思うのは一緒だから、一緒になれるはずです。中越地震の後のフェニックス花火は、そうやってお役に立ってきたんじゃないかしら。こういう時だから、こういう時だからこそ…」会場は同意の拍手に包まれ、花火大会開催が決定される。

映画に登場する様々な人々の思いが詰まった花火。まさに今、目の前の信濃川いっぱいには花火が咲いている。

「みんなが爆弾なんかつくらないで、きれいな花火ばかりつくっていたら、きっと戦争なんか起きなかつたんだな。」映画冒頭の山下清の言葉。

「長岡の花火は、死者を追悼し平和を祈るメッセージなんだ。メッセージは世界に向けて発信し続けなければならない。どんなことがあっても、長岡の花火はまず打ち上げよう。長

岡の花火は日本一の花火じゃない、世界一の花火なんだ。」水害で花火大会開催が危ぶまれた時の長岡市長の言葉。

「かつて戦争がありました。かつて地震がありました。かつてたくさんの方が死んで、たくさん悲しみが宙ぶらりんになりました。…この人たちが胸に刻んだ体験を、私たちは痛みをもって知りました。だから私たちは、別の誰かにそのことを伝えます。まっすぐに、祈りを込めて。みんなと一緒に、この空に花を咲かせましょう。」演劇のラスト、高校生たちの言葉。

何度も繰り返し見た映画、劇中のセリフが目の前の花火とともによみがえり、本当の意味で、映画を見終えることができた気がする。

